

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

すこやかに しなやかに : ことばについて考える

著者	馬場 勝
雑誌名	人権を考える
巻	21
ページ	143-153
発行年	2018-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00007809/

すこやかに しなやかに —ことばについて考える—

英語キャリア学部教授 馬場 勝

【1】はじめに

子どもたちのもめ事や喧嘩の様子を見ていると、自分の思いや気持ちをきちんと言葉で伝えられず、鬱積した気持ちが募り、思い余って手や足を出してしまうといったことが多い。一方、家庭内でも親子の会話が十分に成立せず、親からの問いかけに「別に」とか「ええやん」「うるさいなあ」「ほっといて」などの一言で終えてしまい、その後の話の進展を自らシャットダウンしてしまう子どもも数多くいる。友だちと遊ぶ約束をしても、室内でのゲーム対戦に興じたり、好き勝手に漫画を読んだりと群れて遊ぶということがうんと減ってしまっている。これらの事象を考えたとき、「会話を楽しむ」という経験が幼いころから不十分であるという課題に直面する。

いじめ事案や不登校、暴力事象のみならず、ヘイトスピーチやSNS上の炎上など、学校や社会に見られる諸課題についても、自分の思いをきちんと言葉で伝えると共に相手の気持ちを斟酌するといった能力の欠如に端を発することも多い。全国の多数の学校が、教育目標に「子どものコミュニケーション能力の向上」を標榜し、その育成を研究課題にしているのもうなずける話である。

さて、コミュニケーション能力を育成するためには、バックボーンとして豊かな言葉の獲得と適切な言葉の選択が欠かせない。そのためには、幼いころからの継続的で粘り強い大人のかかわりと言語環境の整備が重要なファクターになってくる。これらは家庭と学校とが連携して進めていかなければならないが、特に学校教育が担う役割は非常に大きいと言わなければならない。

ところで、学校の教員にとって、「話す」「書く」そして「聞く」ことは、いわば商売道具である。毎日子どもたちと向き合い、対話を通して指導していく訳であるから、言葉の伝道者としての役割は大きいものがある。子ども

たちに豊かな言葉のシャワーをいっぱい浴びせ、美しい言葉を獲得させていくとともに、その場に応じた適切な言葉を選択できる能力が育つように指導していかなければならない。

私は学校教育、中でも小学校教育に長年携わってきた。特に校長在任中は、教員の代表として、全校の子どもたちや保護者の前で話をしたり、執筆したりする機会に恵まれた。児童集会や運動会、学習発表会そして入学式、卒業式などの行事の度に、少しでも心に残る話ができれば、そして啓発の場になればと願い、事前に準備して語ってきた。また、毎月出される『学校だより』や年数回発行される『学校新聞』の巻頭の言葉もずっと書いてきた。それらを退職時に小冊子にまとめたのであるが、今回、この原稿を書くにあたって再度読み返してみると、今述べた課題意識を、子どもたちや保護者に語っている文章が多いことに気づいた。コミュニケーション力の基盤である「話す」「書く」そして「聞く」ことに関わる「ことば」のもつ意味とその大切さについて述べたかつての文章を、紹介させていただくことにする。

【2】大切にしたい「ことば」

(1) 会話を楽しむ

この文章は、『学校だより』の冒頭に載せた文章です。「はじめに」で書いたように、会話の大切さを十分にご理解いただき、各ご家庭で会話に花を咲かせていただきたい、会話を楽しんでいただきたいと願って書いたものです。

先日、電車の広告の「会話を楽しんでいますか」というキャッチコピーに目が留まりました。

そういえば、車内でずっと携帯電話を触っている人を毎日のように見かけます。また、すぐ近くに相手がいるのに、メールでやりとりし、顔を合わせない若者が増えているとも言われています。そんなことを見聞きすると、「会話を楽しんでいますか」という言葉が、重みを増してきます。

「コミュニケーション能力を培う」これは、多くの学校が掲げている指導目標です。目標にあげるということは、今の子どもたちのコミュニケーション

ン能力が欠如しているということを意味しています。

ところで、携帯電話によるメールは、手紙と違って気軽に、しかも瞬時に相手と意思疎通のできる便利なツールです。しかし、気安さが原因しているのか、不適切な言葉や何気ない一文が、相手を傷つけたり、誤解を招いたりすることも多いと聞きます。それに引きかえ、顔をつき合わせて話しあう会話は、表情や語り口調から、相手の思いや考えがつぶさに汲みとれるとともに、自分の心持ちがどのようなものであるのかも、同時に相手に伝えることができます。また、その場での修正や補足も可能です。人間が、人間らしく生活をしていくのに、会話は欠かせません。会話の大切さをもっと認識することが必要です。

この会話、悩みや疑問に思っていることが解消していく「解話」になったり、気持ちよくなっていく「快話」になったりや変身します。そして最終的に、回りの人たちを一つにしていく「回輪」につながれば、本当に素敵なことですね。

(2) 今でしょ！

これは、『学校新聞』に載せた文章の一部です。これも家族間の会話、家族のふれあいの時間を大切にさせていただきたいと、保護者のみなさんに向けて書いたものです。

さてわたしが、飲食店で夕飯を食べていたときのことで。家族連れが入ってきました。小学生らしき子どもは、スマートフォンをいじっています。家族との会話にも加わず、ゲームをしているのか、メールのやり取りをしているのか、目は下を向いたままです。さっと食事を済ますと、またスマホを触りだしました。この間、親も注意しません。このシーンを見ていて、わたしは寂しくなりました。せっかくの家族団らんのひと時なのに、これでは台無しです。

家庭での会話時間が年々短くなり、「家族と過ごす時間を大切に、家族と

の会話を大切に」と言われ続け、何年も経ちます。特に幼児期から学童期が最も重要な時期です。家族団らんの心地よさに気づき、「家族っていいなあ」という、肯定感情をこの時期にしっかりと育んでおくことが、健やかな成長に欠かせないからです。また、家族との豊かなコミュニケーションが、友だちや周りの人たちとのより良き人間関係づくりの基礎にもなるのです。

「いつやるか？ 今でしょ。」というCMが、一世を風靡しました。子どもの成長は、早いものです。時間は待つてはくれませんし、もちろん逆戻りもできません。このCMにならっていうなら、「家族団らんが大切なのは今でしょ！家族団らんをつくるのは親でしょ！」そんなふうに思います。

(3) 豊かな言葉の担い手に

次に紹介する文章は、ある年の卒業式の式辞の一部で、巣立ちゆく子どもたちに送った言葉です。中学生、高校生…と、これから続いていく日々の生活の中で、豊かな日本語、心温まる優しいことばを獲得し、そして使いこなしていける人になってもらいたいと願って語ったものです。

わたしたちは言葉を用いて、他の人とコミュニケーションをとり、毎日の生活をおくっています。

この「言葉」について、ある国語辞典をひくと、「人を幸せにしたり、怒らせたり、悲しませたり、楽にさせたり、殺したりできるもの。扱いはとても難しい。」と書かれています。「扱いがとても難しい」のは、口をついて出た言葉によって、実は、自分の心のうちが相手の心に直接伝わるからでしょう。つまり言葉のやりとりは、心のやりとり、心のバトンタッチそのものなのです。ですから、同じ内容のことを言っても、相手の受け取り方が全く違って来たりします。スッと受け入れられたり、反対に反感を買ってしまったら…。みなさんもそんな経験があるでしょう。

これからの長い人生、言葉は一生使い続ける、もっとも大切なツールです。それだけに、周りの人を傷つける言葉でなく、ひとの心を癒せる、豊かな言

葉の担い手になれるように、大事に磨いていかなければなりません。そのためには、これから色々な体験を重ねて、自分の心を磨いていくことが大切です。ひとを思いやる、あなたの豊かな心から、相手を和ませたり、癒したり、励ましたり、時に元気づけたりする言葉が紡ぎ出され、さりげなく、ひとの心に響いていくのです。みなさん、ぜひそんな言葉の担い手になっていってくださいね。

さて、ここに今から十八年前、私が六年生の担任をしていたときに出された『学校新聞』があります。そこに、卒業生に送ったはなむけの言葉が書いてありますので、それを紹介したいと思います。

「言葉って素敵だ。だって、たった一言で友だちを勇気付けたり、幸福にさせたりできるから。

言葉っておそろしい。だって、たった一言で友だちを悩ませたり、困らせたりしてしまうから。

言葉って不思議だ。だって、気持ちがこもっていて、心から出たものか、何となく白々しく、形だけのものなのか、すぐに見破れるから。

言葉っておもしろい。だって、たった一言がいつまでも心の中に残り続けたり、すぐに消えてしまったりするから。

毎日何気なく使っている言葉。使い方によっては、素敵になったり、おそろしくなったりしてしまう。

人間誰も一人で生きていけないのだから、素敵な言葉を使いたいね。自分も友だちも心安らぐ言葉を、自然と使える、そんな人間になりたいね。」

(4) 『人権作文集』発刊に寄せて

私が在職していた学校では、教職員向けに毎年『人権作文集』を出していました。子どもたちの書いた文章を教職員が丁寧に読み、子どもの心に届く先生になれるように努めてきました。この文章は、その発刊に寄せて、教職員に述べた言葉です。

「友だちに心ない言葉を使ってしまい、いさかいになる。」

「単語を並べただけの短い言葉でコミュニケーションを図ろうするため、自分の思いを相手にうまく伝えられない。」

こういった児童の課題を見据えて、私たちは、三年前に「豊かなことばを育てる授業づくり」をテーマに研究をスタートさせました。子どもたちが、豊かな言葉の担い手になるように、言語活動の充実をめざした授業づくりに取り組んできました。この研究は、言い換えると「わたし」を中心にすえ、「わたしのことばで、わたしのことを伝える」取り組みに他なりません。その場、その時に最もふさわしい言葉を選択し、自分の思いや考えを伝えて、共生していく。このことは、人間が人間として生きていく上で、身につけていかなければならない最も大切な学びです。

「人間は、確執を力で解決しようとするのではなく、やさしさを基調に据えた言葉、そして言葉に込められた心を、相手に丁寧に、繰り返し届けていくことで解決が図れること、また、そのように解決していかなければならない」ということを、幼少期から学ばせていくことの大切さを痛感しています。

さて、人権作文集ができあがりました。これを機に、「子どもたちの豊かな成長保障は、彼らが何を考え、何を願っているのかを理解することから始まる」という教育の原点に立ち返り、子どもたちが綴ったことばに託されたところを読み解く作業を丁寧に行い、児童理解を一層深めていきたいと思います。

(5) みんないっしょに

次に紹介する自作の散文は、児童集会で子どもたちに語ったものです。毎年12月初旬に設定されている人権週間にちなんで、互いの違いを認め合い、一緒に仲良く生活していくことの大切さを伝えました。

この世の中には、いろんな人がいます

男の人がいます

女の人がいます

おじいちゃんがあります おばあちゃんもいます

子どもがいます

赤ちゃんがいます

肌の色が白い人も、黄色い人も、黒い人もいます
体の太い人がいます 細い人もいます
背の高い人がいます 低い人もいます
そんな人たちが地球という星にすんでいます
しゃべることばもいろいろです

力持ちがいます 力の弱い人もいます
スポーツの得意な人がいます 苦手な人もいます
文章を書くのが得意な人もいます 苦手な人もいます
勉強の好きな人がいます 嫌いな人もいます
音楽や絵の好きな人がいます 嫌いな人もいます
健康な人がいます 病気の人もあります
そんな人たちが地球という星にすんでいます
住んでいる国もいろいろです

同じように 手や足の不自由な人がいます
目や耳の不自由な人もいます
大きな音や大声が苦手であったり、急に予定が変わると困ってしまい、
どうしたらいいかわからなくなってしまう人もいます
そんな人たちが地球という星にすんでいます

そんな人が、安心して 生活できる世の中にしていかなければなりません
そんな人たちと一緒に なかよく過ごしていくのが、わたしたち人間な
のです

(6) 国語に関する世論調査結果を見て

新聞に公表された「国語に関する国民の意識調査結果」は、私が普段から

感じていることが端的に表されていたので、文章化したものです。

先日、新聞に「国語に関する世論調査」の結果が大きくとりあげられていました。その中で、「ああ、やっぱりなあ」と思いつつ、「これは、えらいこっちゃ」と感じたのは、「手で字を書くことが面倒くさく感じるようになった」と答えた人が42%、「直接人と会って話すことが面倒である」と答えた人が18.6%いるということでした。

また、「口頭で言えば済むことでも、メールを使うようになった」という人が29.5%もあり、十年前の調査より、それぞれ10ポイントほど増えているというのです。

すぐそばにいる人にも、メールでやりとりをする若手社員、ケータイを身につけておかないと不安で、家に置き忘れると、学校に遅刻してでも取りに戻る女子高生の実態を紹介した記事を数年前に読んでいましたが…。パソコンや携帯電話のメール機能の普及がもたらす負の側面が如実に表れた結果だといえます。

「日本語能力が完全に身につけていない子どもに、パソコンなどをどう使わせるか。真剣な検討が必要である」との文化庁のコメントにあるように、子どもたちの健やかな成長を見守る立場にある保護者や私たち教職員は、この調査結果を見過ごすわけにはいきません。

すでにご紹介しておりますように、本校では「豊かなことばとこころを育む授業づくり」について研究を行っています。これは、国語の授業をはじめとする、すべての教育活動を通して、語彙力をしっかりと身につけさせ、その場、その時にふさわしい言葉を使いこなせる子どもの育成に関する研究です。もちろんその根幹には、周りの人としっかりと関わりあい、コミュニケーションを図っていける人間づくりがあります。

「豊かなことばを身につけ、コミュニケーションを楽しめる人間になるための基礎づくりを保護者の皆様と一緒に、しっかりと進めていかなければならない」と再認識させられた結果でした。

(7) 「己所不欲勿施於人」(己の欲せざるところは、人に施すなかれ)

次の文章も、保護者を対象に『学校だより』で私の思いをお伝えした文章です。

私の小学校五・六年の担任の先生が、事あるごとに言われていた言葉に「人に言われて嫌なことは、自分も言うな。人にされて嫌なことは、自分もするな。」があります。この言葉が、孔子の思想の中核をなす「己所不欲勿施於人」(己の欲せざるところは、人に施すなかれ)であることなど、当時の私は知る由もありませんでしたが、この名言だけは、しっかり頭と心に焼き付き、その後の私にずっとついてきた言葉でした。特に私が教員になってからは、恩師同様、よく子どもたちに聞かせてきました。

皆さんも先生や親御さんから、一つや二つ、今も心に残る言葉を教えられた経験をお持ちではないかと思います。

専修大学の岡田憲治教授は、その著「言葉が足りないと言語力になる—現代ニッポン言語力—」のなかで、「豊饒な言葉を使うことで豊かな内面と世界を作り上げる契機が与えられる」と述べておられています。子どもたちの心に響く楔のような言葉を熱く語ったり、また美しく、しなやかな言葉を折に触れて伝えていくことは、子どもたちの心の耕しになっていきます。聞いた時は少々難しく十分に理解できない言葉であっても、何事もどンドン吸収していく時期に、繰り返し伝えていくことは、子どもの内面成長に有形無形に働くことは間違いありません。私が、「己所不欲勿施於人」を恩師から教えていただいたように。

(8) 心の算数

最後にご紹介する文章は、私が保護者に折に触れてお話ししてきた「言葉の大切さ」と「親子の心のふれあい大切さ」に関するものです。保護者の皆さんに心の留めておいていただきたいと願って書いたものです。

心の算数は、いつも不思議である。10の重荷を支えるには、10の助けが必要かといえば、そうとも限らない。たった一つの励ましが100の重荷を軽くしてくれることもある。

これは、読売新聞のコラム「編集手帳」（平成24年9月12日付け）に載せられていた文章の一部ですが、ちょっとした言葉がけや気づかいが、悩んでいる人の重荷を軽減させたり、元気を取り戻すことにつながったり…。逆に「私に任せなさい」と手助けしたことがプラスに働かず、逆効果になってしまうこともあります。「心の算数は、いつも不思議である」と書かれている通りです。では、どうしてこのような違いが生まれてくるのでしょうか。

玄関先で「いってらっしゃい」「ってきます」と笑顔でやりとりするあいさつ。時間があれば四つ辻まで見送り、子どもの背中を見つめながら「今日もがんばりね」と祈る親の姿。食事をとりながら笑顔で交わす親子の時間。「ゆっくりおやすみなさい」と、寢床で声をかける親のやさしい声。日常の何気ないシーンですが、子どもにとっては何物にも代えがたい大事なひとコマなのです。このような時間に、安心、信頼そして感謝の心が耕されていきます。子どもが重荷を背負ったとき、それらが親の励ましに呼応して「心の算数」が機能するのだと、私は考えています。

わたしたちは、子どもが10の重荷に向き合い、乗り越えていくための、心の耕しを忘れないようにしていきたいものです。

【3】むすびに

私が校長在任中に、小学生にあるいは子どもの保護者に語った8つの文章を紹介させていただいた。振り返ってみると、折に触れて「ことばを大切にしましょう。」「ひとの心を和ませたり、励ましたりする、やさしく美しい言葉を使いましょう。」「教師や親は、子どもの最も身近な大人モデルであることを自覚しましょう。」と語ってきたように思う。学校の研究テーマを「こ

とばとところを育てる授業づくり」と設定し、教職員が力を合わせて取り組んでいたことも、その背景にあったのかもしれない。

「言葉の魔術師たれ」これは、教職課目を履修している本学の学生によく話す言葉である。子どもに直接指導する教員にとって、言葉の持つ重みをしっかり認識して、日々実践してもらいたいと願うからである。同じ内容のことを伝えていても、子どもから反感をかい関係を結べない教員がいる一方、子どものやる気を見事に引き出す教員も数多くみえた。保護者に対しても同様で、「先生にお任せします」と全幅の信頼を得る教員と、その言動に不信感を持たれる教員がいる。何気なく言った一言が、問題をこじらせ、解決を遅らせてしまう事例は枚挙に暇がない。

本学は外国語の能力をさらに磨き、それを今後に活かしていきたいと願う学生が集う大学である。いわば豊かな言葉を身につけ、適切な言葉を選ぶことに、長けた人材を育成する大学である。そのような学生に向き合う私自身、言葉の大切さを自覚し、美しい日本語で対応しなければならないと改めて感じたところである。なお、ここに紹介した8つの文章は、未熟な私が出した時々の自己点検と戒めを込めて語ってきたものであることを付記しておきたい。